

当然の結末#2 (鑑賞と干渉、言語能力、円周軌道)

展覧会「当然の結末#2」は、「鑑賞と干渉、言語能力、円周軌道」というサブタイトルを付けている。これは、ある3日間の旅行について書いたエッセイから抽出したキーワードで、今回の展覧会はそのエッセイを基に作品を構成した。

エッセイでは、美術館での鑑賞についての話をしている。鑑賞者(自分)と干渉者(同じように鑑賞している他者)の関係について書いている。そこで起こった状況や感情を図解したり、そこからさらに飛躍して絵画化することを試みている。

神馬啓佑

[2階展示室]

当然の結末 2017 72.5×53.0×2.5cm Acrylic on cotton

懐中電灯を持った自分が鏡に映っている。懐中電灯は鏡がある壁を照らしていて、光源と照らしている光が同時に見える。ポートレイト。ナルキッソス(カラヴァッジオ作)を参考に。

schematic(天球図) 2018 126.5×167.0×9cm Acrylic on cotton

アリストテレスによる天道説を受け継いだ、プトレマイオスが描いた「天球図」を参照。地球から見た、天球上における太陽の見かけの通り道(黄道)と月の見かけの通り道(白道)の、二つの円周軌道の交点(昇交点、降交点)を簡単に図解したもの。あくまで見かけの円周軌道で実際の軌道とは異なる。今回の「鑑賞者」と「干渉者」の図解として採用した。

『ドラゴンボール』

第30巻の一場面。人造人間セルが、タイムマシンで未来から現代にタイムスリップしてきていて、セルの卵の抜け殻を孫悟空とトランクスとブルマが発見する。卵の形状をじっくり見ながら、干渉者の存在を認識するシーン。

untitled (white board) 2018 76.0×56.0×6.0cm Acrylic on cotton

「schematic(天球図)」を解体、再構成したドローイング。ホワイトボードに貼っていくように構成していったもの。

[4階展示室]

untitled (scene) 2017 76.0×56.0×6.0cm Acrylic on cotton

白い絵。シーン。画面が凹んで痕跡が残る。ぼんやりと思いついてる状態。

the viewer / the meddler 2018 33.5×45.4×6.0cm Acrylic on cotton

鑑賞者と干渉者

植物を観賞している人の絵。植物を見ている自分の影が映って、植物に干渉している。観賞者と干渉者という同音異義語に着目して制作。イメージは、フィリップ・K・ディックの短編小説「干渉者」から着想し、高松次郎の「影」シリーズを参考にした。

神馬啓佑 JIMBA Keisuke

1985年 愛知県生まれ 兵庫県育ち

2009年 京都造形芸術大学 美術工芸学科 洋画コース 卒業

2011年 京都造形芸術大学 大学院 芸術研究科 表現専攻 修了

| 近年のおもな展覧会 |

2017 個展「所有物について」block house(東京)、個展「情景について考える」painting laboratory 303(京都)、「なまの記号たち-ポートレイトの現在形-」シャトー小金井2F(東京)、「Dialogue」TEZUKAYAMA gallery(大阪)

2016 「肉とヴェール」京都芸術センター(京都)、「trans art tokyo」旧東京電機大学付近(東京)、「絵と図」成安造形大学(滋賀)、「スピリチュアル イマジネーション」LIXILギャラリー(東京)、「VOCA展 現代美術の展望-新しい平面の作家たち-」上野の森美術館(東京)、「架設」京都精華大学(京都)

2015 個展「塑性について」division(京都)・N-mark(愛知)、個展「眼球に近い面」東山アーティスト・プレイズメント・サービス(HAPS)(京都)、「まぼろしとのつきあい方」ギャラリー・オーブ(京都)、「Before Night Falls 夜になるまえに」ARTZONE(京都)、「魚の骨」3331 Arts Chiyodaアキパタマビ21(東京)、「あれからの、未来の途中-美術・工芸・デザインの最新12人」京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA(京都)

2014 「THE MIRROR」名古屋商工会館(東京)、「KUAD graduates under 30 selected」ギャラリー・オーブ(京都)、「ケヴィン・シールズの欲望」Social Kitchen(京都)、「SANDWICHINTERROOM」HOTEL ANTEROOM KYOTO Gallery 9.5(京都)、「未来の途中-美術・工芸・デザインの最新12人展」京都工芸繊維大学美術工芸資料館(京都)

2013 個展「神馬啓佑展」銀座三越(東京)、「AT PAPER. EXHIBITION "09"」HOTEL ANTEROOM KYOTO Gallery 9.5(京都)、「豊島 MEETING 2013-ART in 片山邸」片山邸(香川)、「Pr PROJECT 2013 REUNION」京都造形芸術大学未来館(京都)、「ULTRA AWARD Colosseum」ギャラリー・オーブ(京都)、「DRAWING LESSONS」ギャラリー・オーブ(京都)

2011 個展「tabula」island MEDIUM(東京)

2010 個展「bodyと language」galleryRAKU(京都)

2009 個展「神馬啓佑展」2kw gallery(大阪)

| 受賞歴 |

「KUAD graduates under 30 selected」展 U30 作家賞/東山アーティスト・プレイズメント・サービス (HPAS)賞、- ULTRA AWARD 2011 最優秀賞、アートアワードトーキョー丸の内 2009 高橋明也賞

神馬啓佑(じんば・けいすけ/1985年・愛知県生まれ)は、2009年に京都造形芸術大学美術工芸学科洋画コース卒業、2011年に京都造形芸術大学大学院芸術研究科芸術表現専攻を修了し、在学中から個展・グループ展に出展を重ね、2016年に『VOCA展 現代美術の展望-新しい平面の作家たち-』(上野の森美術館/2016年、東京)に出品、同じく2016年に『肉とヴェール 清田泰寛・神馬啓佑 二人展』(京都芸術センター)に出展を重ねるなど、近年注目を浴びる画家です。

神馬はこれまで、美術史上の作品を熱心に研究するとともに、絵具が乾かないうちに指で即興的に描く作品や、描いた画面の上からメディウムを塗り、その表面を光沢が出るまで磨き上げた作品、版画のように何層も塗り重ねて制作する作品など、独自の手法を追求するなかで多様な制作手法を用いた絵画作品を展開してきました。

一方、描く画題やモチーフについては、初期から一貫して彼のごく個人的な経験やエピソードが出発点となっており、特に近年に発表している、眼鏡やイヤホン、ベルトなどを描いた大画面のシリーズ作品は自身の愛用品や所有物をモチーフにしています。それらを描く理由について、神馬は「愛着」という感覚や所有物との時間といった“自身の経験とモノの関係や時間”を描きたいと強く考えるようになったためであるとしています。

現在、神馬は所有物のシリーズから発展し、“出来事”を新たなテーマとする新作に取り組んでいます。本展「当然の結末#2」は、昨年に神馬が京都～東京間を旅した3日間の経験を出発点にしたものであり、サブタイトルの「(鑑賞と干渉、言語能力、円周軌道)」は、その3日で出会った景色や人物、エピソードなどから得た彼の印象や思考を端的な言葉で記したものです。

これまでよりも長い時間軸の上で、主観・体験・記憶などの関係性に多くの情報を含むテーマを扱うにあたり、神馬が着目したのは時系列に沿うスナップやストーリーではなく、“図解”という表現手段でした。「図解」が、“説明的なだけでなく造形的である”とともに、“情報が無限に広がる中で「個人的に整理し要約する」ような行為である”と考える神馬にとって、「図解すること」は「絵を描くこと」への新たな気づきを誘発するものとして位置付けられるとともに、それは新たな作品展開への可能性を模索する糸口ではないかと考えています。

本展において神馬は、テキスト(エッセイ)や展示空間のしつらえなどの要素を積極的に取り込みながら、絵画をめぐる様々な関係性をこれまで以上に広く捉えた展示に臨みます。そこでは神馬にとっての「絵を描くこと」と同様の地平に、極めて個人的な体験である「絵を観ること」についてもまた、私たちに改たな気づきを与えてくれる機会ともなるのではないのでしょうか。